

大きな紙袋抱えた父のお土産 あの懐かしい時代の良さをいま

東京都・関東支部事務所長 松尾利光



東京都・関東支部事務所長として2年目に入り、ようやく支部の運営にも慣れつつある今日この頃であります。

早いもので前回から1年足らずで再度の投稿となり、今回は、「私の古き良き時代のパチンコの思い出」について、少年時代のパチンコにまつわるエピソードを交えながら紹介することになりました。少年時代の思い出となると40数年前の出来事ということになり、私が初めてパチンコを知ったのは小



故郷の五島列島の山でのんびり

学生の低学年の頃だったと思えます。その日は確か雨の日で、家で兄弟姉妹で遊んでいると、父が大きな紙袋二つを両手に持ってニコニコしながら帰宅してきました。子供ながらに、「何か、良いことがあった」と思って、父に近づき「この袋、何が入っているの」と尋ねながら中をのぞき込むと、袋の中はお菓子が一杯に詰められており、父は「お父さん、頑張ってお取ってきたぞ」と言いながらお菓子類を私達に一つ一つ手渡しで配ってくれました。

当時は、お菓子類は貴重なおやつの時代でしたので、子供ながら

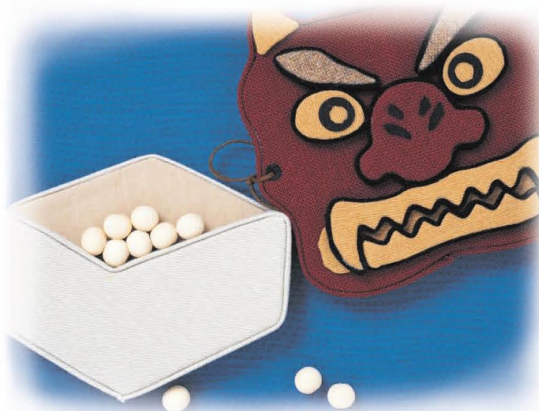
に喜んで「何で、お菓子をいっぱい買ったのか」と不思議に思っておりました。その後も、同様なことが続いたことから父に尋ねると「玉遊びながら、ご褒美で貰った」等とニコニコ顔で話してくれました。

当時は、パチンコが「どのようなものか」は知るよしもありませんでした。

家族を楽しくしてくれるもので、子供達にも期待を持たせる出来事として、今でも鮮明に思い出すことが出来ます。

やがて、中学・高校と進学するにつれパチンコが、大人の遊び場で、パチンコ台で遊び、勝ったらお菓子などの景品が貰えるシステムのお店であることが分かりました。が、「子供の頃の良き思い出」として今でも残っております。

やがて私も成人となり、東京に上京して公務員として働くように



なりましたが、何の因果か分かりませんが、パチンコ関連の店を取り締まる部署に働くようになりました。

上京した当時は、パチンコ店は一般大衆娯楽という感覚でパチンコ店があり、誰もが気軽に入れる店として賑わっておりました。

さらには、店の景品も品物の種類が多く陳列され、お客さんも半数以上の方が景品に交換して持ち帰っておりました。

現在のパチンコは、大衆娯楽と称してはいるが、昔のように家庭に浸透しているとはいえず、一昔前の「玉遊び」のパチンコが懐かしい今日この頃です。

年々、遊技人口が減少する中、パチンコ発祥の原点に立ち返り、パチンコが家庭に愛されパチンコの良さと楽しさを親から子供に楽しく伝えられる「家庭に浸透するパチンコを考える時」に来ているのではないかと思います。